

ユダヤの過越の祭りは、エジプトで奴隷になっていたイスラエルの民を神様が救い出されたことを祝います。イスラエルの民がエジプトを出発する前夜、彼らは傷のない1歳の子羊をほふり、その血を取って、家々の門柱とかもいにつけました。真夜中になって、主はエジプトの地のすべての初子を打たれました。しかし、主が門柱とかもいに血をご覧になった家には死は訪れませんでした。

それから約1500年が経ちました。イエス様の弟子たちは過越の祭りの食事を準備しようとしていました。しかし、それまでも多くのことによって、弟子たちはこの夜のために整えられていました。イエス様が地上での働きを始められた頃に、バプテスマのヨハネが言ったことを聞いてください。

「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」(ヨハネ 1:29) またマタイ 3:6にもその頃の記録があります。「そこで、パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちといっしょになって、イエスをどうして葬り去ろうかと相談を始めた。」パリサイ人とヘロデ党員はかつては敵対していたのに、主イエス様を憎むことで結束し、実にイエス様を殺そうと計画するほどにまで憎んでいたのです。

マタイ 26:3には、祭司長と民の長老たちが集まってイエス様をだまして捕らえようとしていたことが記されています。その数日後に、彼らはイエス様を捕らえ、むち打ち、ローマの十字架刑でイエス様を殺しました。

さらにひどいことに、主の苦しみと死の直前に、イエス様ご自身の友が彼を裏切りました。主の弟子のひとりユダはイエス様を裏切って祭司長たちに引き渡しました。「そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が祭司長たちのところへ行って、こう言った。『彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。』すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。」(マタイ 26:14-16)

銀貨三十枚というのは、イエス様を裏切るのに相応の金額ではありません。それは牛に突かれて死んだ奴隷の賠償金と同額です。(出エジプト 21:32) マタイも後にこれがゼカリヤ 11:12にある「彼らは、私の賃金として、銀三十シケルを量った」という預言の成就であると明かしています。(27:3-10)

ユダは主を一度でも信じていたのでしょうか。彼のイエス様への話し方に気づきましたか。彼の言ったことと、彼以外の11人の弟子が言ったことを比べてみましょう。場面は26章21節から始まります。「みなが食事をしているとき、イエスは言われた。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりが、私を裏切ります。』」

ユダ以外の11人の弟子の反応はこうです。「すると、弟子たちは非常に悲しんで、「主よ。まさか私のことではないでしょう。」とかわるがわるイエスに言った。」(26:22) では、ユダは何と言ったのでしょうか。「すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。『先生。まさか私のことではないでしょう。』」マタイによる福音書の中で、11人の弟子は、イエス様を一度もラビ(先生)とは呼んでいません。ユダはイエス様を主とは呼びませんでした。そして、後にユダはイエス様に口づけをして裏切ります。そこでも彼はイエス様を先生と呼んでいます。(26:49) マタイ 10:2-4には、イエス様を裏切ったイスカリオテ・ユダも、主の弟子として名を連ねています。しかし、ユダはイエス様を信じていませんでした。おそらく、良い先生とは思ったでしょうが、主ましてや自分の救い主とは思わなかったのです。

今日でも多くの方がそうです。本当に信じている人はイエス様をわが主、救い主と呼びます。しかし、多くの人にとってイエス様は良い先生でしかありません。イエス様の教えを学ぶ人はそう言うでしょう。しかし、それは彼らがイエス様を信じていることにはなりません。

クリスチャンという言葉は本当はどういう意味でしょうか。キリストを信じている人という意味だという人もいるでしょう。イエス様を主、救い主として受け入れていると。その通りです。では、「～ちゃん」という表現はどうでしょうか。これは、私たちがキリストに属する者であることを示しています。私たちはキリストに似た者、キリストのご性質を表す者であるべきなのです。キリストと一つになって初めて、私たちはキリストの真のご性質を表すことができます。これこそ、使徒パウロが語るキリストにある新しいのちです。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ 2:20)

私たちはイエス様の御名を裏切ったことがあるのでしょうか。イエス様の御名を軽々とらえるとき、考えや言動において罪をおかすとき、私たちはイエス様の御名を裏切ります。ヨハネは彼の書いた一通目の手紙でこのことに触れています。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」(1ヨハネ 2:16)

しかし、神様をほめたたえましょう。なぜなら、私たちには希望があるからです。私たちの希望の中心におられるのはキリストです。確かに私たちは罪をおかし、神様の栄誉を受けることができません。しかし、イースターのメッセージにもあったように、私たちには、御父に対し私たちを弁護して下さるお方がいます。「私たちには、御父の御前で弁護して下さる方がいます。それは、義なるイエス・キリストです。」(1ヨハネ 2:2) またローマ 8:34 にはこうあります。「死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなして下さるのです。」

主の死の直前3日間に起こったことは、主にとって不測の出来事ではありませんでした。「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」(マタイ 16:21) イエス様は 17、20、26 章でも同じことをご自身の口で語っておられます。

イエス様は神様のご計画と目的をご自身が達成されることをご存知でした。マタイ 20:28 のイエス様の言葉を聞いてください。「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである…」使徒パウロは、イエス様が来られたのは神様の永遠のご計画の成就のためであると正しく理解していました。「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖い出すため、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。」(ガラテヤ 4:4-5)

マタイ 26:21-22 で弟子たちは裏切りについて無実であると主張します。ユダも同様です。彼は何を考えていたのでしょうか。「わたしと一しょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです。」(26:23)と主が裏切り者が誰かを語られたのを聞いた直後なのにです。ユダは自分のしたことを知っていたはずですが。ユダのように誰かを裏切って、それに無知であることができるのでしょうか。

主がその後言われた言葉はユダの心に刺さったことでしょうか。「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」(26:24) ユダがイエス様を裏切ることを預言した箇所は詩篇 41:9 にあります。「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。」

ユダ以外の弟子たちもイエス様を裏切りました。マタイ 26:31 で(ザカリヤ 13:7 を引用し)主は、彼らがみんな主から離れて行くと言われました。「あなたがたはみな、今夜わたしのゆえにつまずきます。『私が羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる。』と書いてあるからです。」イエス様は一人で苦しみ、死なれました。確かに、二人の人がイエス様と一緒に十字架にかけられました。しかし、彼らはイエス様が両手を広げられた、その先の届かない所にいました。

そんな中で、ペテロはイエス様を決して裏切らないと誓います。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」(26:33) イエス様はこう答えられました。「『まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。』ペテロは言った。『たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどは決して申しません。』弟子たちはみなそう言った。」(26:34-35)

しかし、彼らは全員イエス様を見捨てました。マタイ 25:56 後半にあるように、イエス様が捕えられたとき、「弟子たちはみな、イエス様を見捨てて、逃げてしま」いました。そのすぐ後に、ペテロはイエス様を三度知らないと言いました。(26:69-75) 同じ日(受難日)に、主イエス様は十字架につけられました。そして亡くなり、墓に葬られました。

皆さんは台風を上から撮った写真を見たことがありますか。巨大な雲が目を中心に回っているのが見えます。しかし、台風目の中にいれば、真上に青空を見ることができます。雲はありません。台風の風は、暴風です。しかし、台風目の中の風はやさしく、静かです。そして、台風目の通過すると、また暴風が吹き荒れます。目が遠のくにつれ、それまでの被害は、再び訪れる暴風によって悪化します。

主イエス様は地獄からやってきた台風の猛威に耐えられました。その激しい苦痛はマタイ 26:38-39 に描かれています。イエス様は三人の弟子と共にゲツセマネの園へ行かれました。彼らに語られたときのイエス様の悲しみをマタイは私たちに伝えてくれます。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしと一しょに目をさましていなさい。」(26:38) 39 節のイエス様の祈りにもその激しい苦悩が表れています。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」

マタイは、イエス様の働きのはじめから十字架の死まで主の苦悩を描き続けました。嵐雲は約三年間大きくなり続けました。十字架を避けることはできません。神様の永遠のご計画はイエス様が私たちのために苦しみ、三日目に死からよみがえられることでした。すべては私たちの救いのためでした。

「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは…私たちが神のみもとに導くためでした。」(1ペテロ 3:18) またさらに2コリント 5:21にはこうあります。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」

神様があなたをどれほど愛しておられるか知りたいですか。それなら、十字架を見てください。十字架上で、「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8) 神様がそのひとり子をお遣わしになったのは、あなたを愛しておられるからです。そして、御子イエス様はあなたを愛しておられるからこそ、あなたのために苦しみ、死ぬ覚悟をされました。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」(1ヨハネ 4:9) イエス様はあなたのため、そして私のために苦しみの杯を飲む覚悟をされました。それでも、間もなく訪れる死がイエス様を飲み込んでしまうのではと思います。

イエス様は恐れおののいていても当然だったでしょう。しかし、イエス様を囲む台風の目をのぞき込むと、イエス様は恐れておられません。机の下に隠れてもおられません。イエス様は弟子たちにご自身の死の意味を表す目に見えるしるしをお与えになりました。それは、まるで天が開いたようでした。主はたくさんの人々の贖いのためにご自身の命をお捨てになる事の意味を明らかにされます。

弟子たち、そして皆さんもわたしも、聖餐の中に神様の恵みを見ることができます。主の御体が私たちのために砕かれます。主の血潮が私たちのために流されます。「彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これはわたしのからだです。』」(マタイ 26:26) イエス様は何を言おうとしておられるのでしょうか。イエス様がパンを裂かれたように、その御体が砕かれます。しかし、御体が砕かれるだけではありません。パンは食べられなければなりません。ある説教者はこう記しています。「パンが食べられて私たちの体の一部になるのと同じくらい密接に、イエス様の死は私たちに密接なものです。それは私たちの一部であり、私たちはその一部なのです。」また、使徒パウロは「私はキリストとともに十字架につけられました。」と書いています。主の御体が砕かれ、主の十字架の死にあって、私たちは主と一つにされます。キリストと一つであることが今、私たちの人生をかたち作るのである。それは、私たちがキリストに似た者へと変えます。そして、パウロは続けてこう言っています。「いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ 2:20)

その後、主イエス様はワインの入った杯を取って言われました。「みな、この杯から飲みなさい。これは私の契約の血です。」(26:27-28) 敬虔なユダヤ教徒なら、これを聞いて後ずさりするでしょう。というのも、旧約聖書には、血を食べたり飲んだりしてはならないと書いてあるからです。(レビ記 17:10-12) もし血を飲むなら、その人は契約の民から切り離されます。しかし、主イエス様は「みな、この杯から飲みなさい。これは私の契約の血です。」と言われます。

先ほど引用した説教者はこうも言っています。「ワインが飲まれて私たちの体の一部になるのと同じくらい密接に、イエス様の死は私たちに密接なものです。これこそがイエス・キリストの血により私たちが全ての罪からきよめられる唯一の方法です。」イエス様の御体はあなたのために砕かれました。また、イエス様の血はあなたのために流されました。そして今、主イエス様はご自身の血について四つのことを私たちに教えておられます。

26:28の「これは、わたしの契約の血です。」という言葉は出エジプト記 24章につながります。神様がイスラエルと契約を結ばれた箇所です。契約の誓いのときに、モーセは祭壇にいけにえの血の半分を注ぎかけました。契約の書が民に読んで聞かされました。そして、神様はどのようにその契約を保証されましたか。出エジプト記 24:8にこうあります。「そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。『見よ。これは、これらすべてのことばに関して、主があなたがたと結ばれる契約の血である。』」

主イエス様により、神様とその民の間に新しい契約が結ばれました。それは、神様とその民との新しい関係です。そして、血—「世の罪を取り除く神の子羊」であられるイエス様の血—がこの契約を保証しています。

次に、マタイ 26:28には「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」とあります。これはイザヤ書 53:11-12のしもべの歌につながります。「…わたしの

正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。…彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」

多くの人のために、皆さんや私のような罪人のために、主の御体は砕かれ、主の血は流されました。わずかな人のためではなく、御名を裏切った私たちのためなのです。うわさ話をする人、主の御名をみだりに唱える人、人のものを欲しがる人、悪口を言う人、神様に対して罪をおかした人のためです。これは素晴らしい知らせです。そして、これは主イエス様が私たちのために耐えてくださった台風の目の中で、神様が私たちに表された恵みです。

三つ目に、神様にそむいた私たちは罪の赦しを知ることができます。「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」(イザヤ53:5) エレミヤ31:34で明らかにされた新しい契約の祝福は私たちのものです。主は言われます。「私は彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

主イエス様はあなたの罪悪感と恥を取り払うために死んでくださいました。皆さんや私のような多くの罪人のためにいのちを捨ててくださいました。あなたを自由にするために死んでくださったのです。「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」(1ヨハネ1:7) キリストにあってあなたは新しく造られた者です。(2コリント5:17) そして、主の聖餐に臨み、パンを取り、杯から飲むとき、私たちのためにキリストが死んでくださったことを覚えます。パウロと共に私たちもこう言います。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ2:20)

4つ目はマタイ26:29にあります。「ただ、言うておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日まで、わたしはもはや、ぶどうの実でつくった物を飲むことはありません。」よみがえりの日が来ます。その日私たちは私たちに罪から救うために死んでくださったお方であって、喜びます。黙示録19:16にあるお方と共にいるのです。「その着物にも、ももにも、『王の王、主の主。』という名が書かれていた。」

キリストの再臨まで、クリスチャンは共に聖餐にあずかります。キリストの死を覚え、再臨を待ち望みます。パンをとり、杯から飲むことは、霊的な意味でキリストに養われるということです。パンとぶどう酒は、ただのパンとぶどう酒ですが、それらはキリストのご臨在を示します。ウエストミンスター信仰告白から引用すると、「**霊的に、十字架につけられたキリストと彼の死のすべての祝福を受け、またそれに養われ**」ます。(29章7)

ですからこれは、高慢な人、横柄は人、残忍な人、人殺し、不正をはたらく人、無慈悲な人、戦争を起こす人、迫害する人などの信じていない人にとって、素晴らしい知らせです。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめます。」(1ヨハネ1:7) しかし、そのためには贈り物を受け取らなければなりません。罪人は一人一人が悔い改め、信仰のうちにキリストのもとへ来なければなりません。そうして初めて私たちは赦され、主の聖餐に招かれます。

これは、クリスチャンにとっても本当に素晴らしい知らせです。私たちは、しばしば全身全霊を込めて神様を愛さず、自分を愛するように隣人を愛しません。ですから、クリスチャンが集い、主の聖餐にあずかること、それも頻繁に行うことはとても重要です。使徒パウロのことば通りです。「あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」(1コリント11:26)

アーメン